

見る力

北島 尚志

五、六歳児対象（三十人あるいは親子三十組）の劇遊び「魔法の森の招待状」という作品があります。

『魔法の森から招待状を持ってきた魔法使いと共に、魔法の森で一日遊ぼうということになりました。スカーフで魔法使いに変身！いざ出発！見えないうちにまたがり空を飛ぶ子ども達、魔法の森で楽しく遊んでいるところにマール一族がやって来てスープにしようと襲い掛かってきます。さあ子ども達は知恵と勇気と願う力でマールに挑むのです。』

共通のストーリーを提示し共に楽しむ大人として私達は彼らの前に現れます。しかし、何せ初対面。

・遠巻きに見てお母さんの足に絡み付く子。

・「私魔法使い見たことあるよ、早くいききたいな」という積極派。

・「つまらない！帰る」と不安がつている子。

・「太ってるねおじさん、かっこわるい」「魔法使ってよ」と茶化す子。

・舞台にある布で、作った森の中に隠れている子。

まさにバラバラのその気と向き合います。

私達はまず、そのバラバラのその気を否定せず、受け止め、それを引きうけて進んでいこうとします。同時に見えているものを疑います。そこからだけでは見えてこない何かを見るために見えてる姿の後ろにある心の動きに思いを馳せていこうとします。バラバラのその気は、箒に乗って空を飛ぶ場面でも勝手気ままです。何しろ映画のような本物のカッコいい箒などありません。ただ一人一人のイメージの力を信じるしかないのです。

・しっかりとみえない箒をつかもうとする子。

・何本もの箒を持つ子。

・はじめは持つものの飛び出したら（走り出したら）関係なし。ひたすら暴走。

・ゆったり飛ぶ（走る）子。

・怖くて飛べない子。

・友達をじっとみている子。

・二、三人乗りしている子。

・奇声をあげぶつかってくる子など。

空は新米魔法使いで混みあいます。そこには正しい乗り方の指導もないし、列からはみ出さないようにと注意される事もあります。自分が決めた自分のスタイルを自分のペースで行っているのです。しかし互いの姿を見て笑いあったり声を掛け合ったり、その気のエネルギーが流れ始め、伝わり始め、確かに風が吹いてくるのです。やがて魔法の森の入り口という目的に向かって同じものを見始めます。

さて、魔法の森の入り口に入ったものの、その先に進むには、森の番人に魔法の力を見せなくてはなりません。番人から出されるテーマは、

「動物になれ」

「こわいものになれ」

「おいしいものになれ」

これらのテーマに沿って自分達の身体を使って表現

するのです。

動物になるためにどうするか？大人と子ども別々になり、グルーブごとの魔法の作戦会議が開かれます。大人グルーブはゾウに決まり、皆で身体を作り耳と長い鼻をつけたゾウの形が出来上がります。もちろんすぐわかります。

一方子どもグルーブもゾウをしました。ある子が二人で「僕達ゾウになる！」と言います、ゾウになって（つもり）歩きます。すると他の子が「僕しっぽになる！」といって、ゾウの子の後ろについて身体全身でしっぽそのものになっています。

じゃあ私は「ぞうさんが食べるリンゴになる、食べてね」といって座ります。こうしてリンゴを食べるゾウになるのです。ゾウかどうかは一見ではわからないのですが動きをよく見てみるとだんだん見えてくるのです。

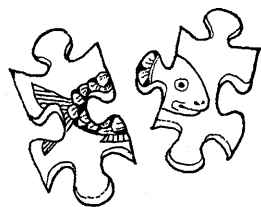
他の大人グルーブは蛇です。一人一人つながって

とぐろを巻いたりしてこれもすぐわかります。もう一つの子どもグルーブはひたすら走り回っています。良く見ると前で走ってる子は飛び跳ね、後にいる子は四つんばいでも

のすごいスピードで走っています。それはチーターがウサギをつかまえるシーンです。

「おいしいもの」のテーマでも、モモと決まるとモモの形を作ると思いきや桃太郎の話しをすることになり桃太郎誕生までを行ったり、スイカとなれば海辺ですか割り大会をやったり、又一人一人が肉になったつもり、野菜になったつもりで、ワクの中に入って身体をクネクネゆすって出て行くのを繰り返しています。何とシャブシャブでした。

大人は見えている姿のある形をなぞろうとします、いわば「静」として見えています。しかし子ども



らは「動」として見ているのです。一見は確かなんだかわからないのだけれど、形としての見せ方は上手ではないのだけれど、そこに生きているというか、存在していて、彼らの見る力の一つ一つ物語があるのです。従ってそれをどう見るのか、その物語を見る力が私達に問われてきます。先入観や思い込みを捨てまっさらになって見なくてはなりません。そして、私たちがどう見えるかが「力」になるためには次のことが必要になってくるのだと思います。

① 「それでは見えない」と形をなぞらせ、「鼻は長いよね。やりたい人?」「大きな耳はだれがやる?」と指導者の答えに誘導しないこと。

② 一人一人違うことを認めそれを楽しもうとすること。

③ 一人一人が自分のおもしろさに向かつていればその気は自らが動かしていくことを信じること。

④ さらにその違いを受け入れ、テーマである例え

ば「おいしいもの」に向かつてイメージが積み重なるような、提案をしていくこと。

現れてる姿から現われてこない姿を見ていく怖くて素敵な時間です。

お母さんから離れられなかった子や、茶化してた子など彼らのバラバラのその気はやがて自らの力で大きくなっています。そしてその気を動かしていく大きなエネルギーは大人の「見る力」ということを毎回痛感します。見る力がないのに「今の子どもはしらけてて……」と言ってはならないと思います。

さて、番人に認められた魔法使い達はいよいよ魔法の森の奥への進んで行きます。このつづきはまたの機会に……。

(あそび・劇・表現活動センター アフタフ・バーバン)